

# アカデミア

文学・語学編 (86)

---

## 論文

- 虚辞の移動と EPP ..... 有元 将刚…( 1)
- OED 中の日本語起源の英語 ..... 佐々木剛志…( 35)
- 言語獲得における主節不定詞現象:縦断的觀察的研究  
..... 中谷 友美, 村杉 恵子…( 59)
- L'esclavage dans le roman malgache d'expression française:  
la traite en amont, attitudes diverses et conséquences  
..... Raoul F. HOLLAND…( 95)
- Guidelines for Assessing Target Language Acquisition  
..... V. Bose JAMES…(119)

## 注解

- 蘇軾詩注解 (五) ..... 山本 和義, 蔡 毅, 中 裕史  
中 純子, 原田 直枝, 西岡 淳…(170)

---

2009年6月

南 山 大 学

---

# 言語獲得における主節不定詞現象：

縦断的観察的研究

中谷 友美 村杉 恵子

## Abstract

Root Infinitives (RIs) are non-finite verbs in root contexts, which are widely observed in early child languages. This paper, based on a longitudinal observational study with a Japanese-speaking child (0; 1-1; 9), supports the proposal that there is a Root Infinitives Analogue (RIA) stage, or very early non-finite verb stage, in Japanese acquisition (Murasugi, Fuji and Hashimoto 2007, Murasugi and Fuji 2008a, b, Murasugi 2009). There is a RIA stage in child Japanese, and the verbal form, *V-ta* forms (past-tensed forms) is used for the irrealis meaning at the age of one. We also report that *V-tyatta* forms (perfective forms) are used in addition to the *V-ta* forms as RIAs at the later stage of the very early non-finite stage.

Then, we discuss the reason why *V-ta* forms (and *V-tyatta* forms) can be RIAs in child Japanese. Cinque (2004) and Kawai (2006) propose that there are non-finite verbs which look like finite verbs, and the surrogate forms of non-finite verbs are derived by an operation to make the verbal stems well-formed morphological words in Salentino/Serbo-Croatian, and Japanese, respectively. Murasugi (2009) argues that children use the *V-ta* form as the RIA as it is the most unmarked surrogate form in adult Japanese, and Japanese-speaking children, even at the age of one, know such an operation. We basically support her proposal, and explain our observational findings of the short period of appearance of *V-tyatta* forms in the late RIA stage as the stage where the child finds another possible surrogate form of non-finite verbs.

## 1. はじめに

主節不定詞 (Root Infinitives) の現象は、主節において不定形の動詞を幼児が自発的に用いる「誤用」を指し、特にドイツ語、オランダ語などの言語を母語とする幼児言語において共通に観察される。Murasugi, Fuji, and Hashimoto (2007) (以下 MFH), Murasugi and Fuji (2008a, b) (以下 M&Fa-b), ならびに Murasugi (2009) は、この現象が言語獲得初期に幼児の持つ言語知識を反映するものであり、特定の言語にだけあらわれる現象ではないとし、日本語においても主節不定詞の変種 (Root Infinitive Analogue = RIA) の段階が存在すると提案している。

彼らは、日本語を母語とする幼児すみはれ (野地 1973-1977) のコーパス分析、ならびに「あっくん」に関する 8 年にわたる縦断的観察に基づき、いずれも 1 歳後半において、すみはれの場合には過去および完了を表す終助詞「た形」、あっくんの場合には命令形「て」形が、主節不定詞 (RI) に類似した現象としてあらわれたと報告している。彼らは、これらの初期の動詞形式が大人の意味用法より広く用いられることにも注目し、例えば「た形」で命令や要求、願望などをあらわす点は、ヨーロッパ諸言語の主節不定詞 (RI) の意味的特徴である「Modal Reference Effects」(以下 MRE) と共通すると提案する。そして主節不定詞 (RI) とは、動詞の時制の未指定な段階にある幼児が、主節に動詞の要素を不定詞形であらわす現象であり、より一般的には、当該の文法 (ならびに言語獲得) において、時制に関して未指定の形式を用いていると提案している。更に Murasugi (2009) においては、Cinque (2004), Rizzi (1993/1994), Abe (1992) の大人の文法における、時制の未指定な動詞形についての分析に基づき、日本語において「た形」は、形態的必要性によって語尾に付けられる選択肢の中でもっとも自然なものであり、わずか 1 歳の幼児が、その言語の動詞と時制の特徴を既に知っているとして提案している。

本論文では、別の日本語母語幼児「ゆうた」の縦断的観察 (0; 1-1; 9) に基づき、Murasugi らの研究結果を支持する記述的事実が得られたことを報告する。具体的には「た形」が主節不定詞の変種 (RIA) として 1 歳台に発話される点、またその意味的特徴について同様の現象が観察されたことを報告する。さらに、動詞の活用が未獲得な段階において、「た」形があらわれた後で、短い期間ではあるが「ちゃった」形も併用される時期があったことも付記し、その上で、その理由について統語理論的な分析を加える。

## 2. 日本語における主節不定詞現象の変種 (「Root Infinitive Analogue」) の実在性

### 2.1. 先行研究

主節不定詞 (Root Infinitives) の現象とは、(1)に示すように、主節において定動詞の形ではない形 (non-finite form) で動詞があらわれる現象で、幼児の言語 (デンマーク語、オランダ語、フランス語、ドイツ語など) によく見られるものであるとして報告されている。(Wexler 1994, Rizzi 1993/1994, Guasti 2002 等.)

- (1) a. Hun sove. (Jens, 2; 0) (デンマーク語)  
she sleep-INF (彼女 寝る。)
- b. Earst Kleine boekje lezen. (Hein, 2; 6) (オランダ語)  
first little book read-INF  
'First (I/we) read little book.' (初めに (私/私たちが) 小さな本読む。)
- c. Dormir petit bébé. (Daniel, 1; 11) (フランス語)  
sleep-INF little baby  
'Little baby sleep.' (小さな赤ちゃん 寝る。)

- d. S[ch]okolade holen. (Andreas, 2; 1) (ドイツ語)  
 chocolate get (チョコレート もらう。)(Guasti 2002)

従来の研究において、主節不定詞 (RI) 現象の特徴として、(2)に示すような点が指摘されてきている。

- (2) a. 定動詞 (Finite Verbs) が同時期にあらわれる。  
 b. 時制が完全には指定されていない。  
 c. 空主語を許さない言語においても、空主語が観察される。  
 d. Modal Reference Effects が見られる。  
 e. 動詞はイヴェント動詞が使われる。

(2d) の Modal Reference Effects (= MRE) とは、(3)に示すように、定形でない動詞が、法もしくは仮定の意味を持ち、意志や指示、意図を表す現象で、主節不定詞 (RI) の段階の幼児の特徴といえる。(Hoekstra & Hyams 1998, Wijnen 1996 等.)

- (3) a. Niekje buiten spelen. (オランダ語)  
 Niekje outside play-INF  
 'Niek (talking about himself) wants to play outside.'  
 (Niek (話者) は外で遊びたい。)
- b. Papa ook boot maken.  
 Papa also boat make-INF  
 'Papa must also build a boat./I want Papa to also build a boat.'  
 (パパにもボートを作ってほしい。)

- c. Eerst kaartje kopen!  
 First ticket buy-INFL  
 'We must first buy a ticket.'  
 (初めにチケットを買わなくてはならない。)(Wijnen 1996)

では、不定詞を持たない言語においては、このような現象はどのように見られるのだろうか。Hyams (2005) は、不定詞を持たない言語のひとつであるギリシャ語においては、裸の完了形 (Bare Perfectives = BP) が主節不定詞の変種 (RIA) であると提案している。ギリシャ語の大人の文法では、完了相の動詞は、過去形になるか、もしくは完了の助動詞か法を表す接辞が前になければならないが、(4)に示すように、ギリシャ語母語話者の幼児は、時制や法の形態素を持たない形で、完了相の動詞を発話する。

- (4) a. Pio vavasi (child form of  $\delta$ iavasi).  
 Spiros read-3<sup>rd</sup> per. perf. (Spiros が読む。)
- b. Ego katiti.  
 I sit-3<sup>rd</sup> per. perf. (私が座る。)
- c. Kupisi i kateti.  
 wipe-3<sup>rd</sup> sing. perf. the mirror (鏡を拭く。)
- (CHILDES, Stephany 1997 in Hyams 2005)

そして、Hyams (2005) は、裸の完了形 (BP) と主節不定詞 (RI) との共通点を、(5)のように示している。

- (5) a. 定形の節 (Finite clause) が同時期にあらわれる。  
 b. 定動詞 (Finite Verbs) ではない。  
 c. MRE が見られる。

## d. 動詞はイベント動詞が使われる。

日本語母語話者の幼児の発話に主節不定詞の変種 (RIA) 現象が見られるのか否かについては、議論が分かれる。Sano (1995, 1999) は、3人の幼児の縦断的観察研究をもとに、ヨーロッパ言語にみられる主節不定詞 (RI) の年代に相当する二歳児の幼児においてこの現象はないとし、したがって、日本語のように空主語をもつ言語において主節不定詞 (RI) 現象はないと提案している。また、加藤、佐藤、武田、見吉、酒井、小泉 (2003) は、日本語においては、現在形か過去形が主節不定詞の変種 (RIA) となりうると推測し、2歳の日本語を母語とする幼児のコーパスデータを分析した結果、どちらの形においても誤用が少なかったことから、やはり日本語には主節不定詞 (RI) 現象がないと論じている。

一方、MFH, M&Fa-b, そして Murasugi (2009) では、日本語母語話者の幼児 (あっくん、ならびにすみはれ (野地 1973-1977)) の発話分析をもとに、日本語においても主節不定詞の変種 (RIA) の段階があると提案している。彼らは日本語における言語獲得の初期段階には、定動詞形以外の形式の動詞があらわれ、すみはれの場合、その形式は過去形の「た形」であるとしている。更に(6)に示すように、MRE も観察されることを指摘し、これらを日本語においても主節不定詞の変種 (RIA) の現象があると考えするための根拠の一つとして示している。

- (6)a. アッチ, アッチ, アッチ, イッタ (1;6) [非現実/意志]  
 (あっちに行きたい/あっちに行って。)
- b. チイ, シタ (1;7) [非現実/意志]  
 (おしっこをしたい。)
- c. アッチ イタ (=イッタ) ナ, ナ (1;7) [非現実/意志]  
 (あっちに行きたい。)(MFH, M&Fa-b)

例えば (6a) では、大人の文法では「行く」もしくは「行け」となるところを、「イッタ」と「た形」であらわし、「行きたい」もしくは「行ってほしい」という要求の意味をあらわしている。同様に (6b) では「したい」となるべきところを「シタ」、(6c) では「行きたい」もしくは「行く」となるべきところを「イタ (=イッタ)」とあらわしている。

M&F, M&Fa-b, ならびに Murasugi (2009) では、さらに、日本語の主節不定詞の変種 (RIA) は、単文に起こる現象であること、主題格などの補文投射 (CP) に関連するものとは共起しないこと、主格や繫辞 (コピュラ)、形容詞の活用などの時制 (T) 投射に関連するものとも共起しないことなど、ヨーロッパ言語の主節不定詞 (RI) との共通点を指摘し、日本語にも主節不定詞の変種 (RIA) の段階があるとする議論に更なる根拠を与えている。また、彼らは、この主節不定詞の変種 (RIA) のあらわれる時期には、談話によってライセンスされる空代名詞 (*pro*) も、話題 (Topic) としての名詞句も、両方とも『主語』の位置にあらわれることを指摘し、空代名詞をもつ言語には主節不定詞の段階が存在しないとする従来の仮説に対して、(i) 日本語という *pro-drop* 言語にも同段階が存在し、(ii) 同段階が必ずしも常に主語 (話題) を落とす段階ではないとして反証している。その上で、より大きな提案として、語幹のみでは述部となりえない特徴をもつ言語であるイタリア語や日本語の場合、主節不定詞の変種 (RIA) が主節不定詞 (RI) よりも早い段階であらわれ (一歳台にさえ観察され)、このような言語の特徴として、(ヨーロッパの言語とは異なり) 定動詞と主節不定詞の変種 (RIA) が随意的にあらわれるものではないと示唆している。

## 2.2. ゆうた (0; 1-1; 9) の主節不定詞現象の変種 (「Root Infinitive Analogue」): 2年間の縦断的観察研究

本節では、日本語を母語とする幼児「ゆうた」(0; 1-1; 9) の縦断的観察に基づき、日本語を母語とする幼児の初期の言語獲得段階において主節不定

詞の変種 (RIA) の段階があるとする仮説を検証する。本稿では、2年にわたる縦断的研究の結果として、ゆうたにも主節不定詞の変種 (RIA) の特徴を示す発話が観察され、またその特徴は、一定の動詞的要素が願望や未然をあらわすなど Murasugi らの研究報告と酷似するものであったことを報告する。

また、Murasugi らの研究結果と同様、その時期は短く、かつ、2歳以下の時期であったことも示す。ゆうたにおいては、1歳3ヶ月から1歳6ヶ月までは、MFH、M&Fa-b ならびに Murasugi (2009) の報告と同様に、彼の発話する動詞的要素がすべて「た形」のみであらわれた。その後1歳6ヶ月頃から「ちゃった形」が出現し、1歳7ヶ月においては、「た形」と併用するようになったが、「た」形と「ちゃった」形はいずれも、未然の意味が観察される (MRE) など、主節不定詞 (RI) 特有の現象を示し、また他の動詞の活用はみられなかった。この段階が終息したとみなされるのは1歳8ヶ月であった。

被験者 (ゆうた) の両親ならびに祖父母はいずれも日本語を母語とするものであり、本稿で報告する縦断的研究は、週に2時間ずつ、おもに母親 (中谷) が自然な場面 (例えば、ミニカーで遊んでいる場面や、食事をしている場面) をビデオ撮影し、そのビデオ内容を起こし、分析したものに基いている。

### 2.2.1. ゆうたの初期の不定動詞「た」形

興味深いことに、MFH、M&Fa-b、Murasugi (2009) の提案するように、ゆうたの初期の動詞的要素もまた、すべて「た形」であらわれた。1歳3ヶ月から1歳6ヶ月までは、彼の自発的な発話における動詞の形態は、全て「た形」であった。

ゆうたが最初に獲得した動詞は「ツイタ」である。(7)に示すように、初めは祖母と遊ぶ中で、祖母が電気を点けたり消したりするたびに、祖母が「点

いた!」「消えた!」と言うのに対して、「ツイタ」「キエタ」と繰り返して発話するに留まっていたが、次第に自発的に電気が点いたり消えたりする場面で「ツイタ」と「た形」で発話するようになった。<sup>1)</sup>

(7) 「ツイタ」祖母が電気を点けたり消したりするたびに「点いた!」「消えた!」と言うのに対して繰り返し。(1;3) [繰り返し]

(8)及び(9)は、いずれも(7)の「ツイタ」があらわれた直後に観察された発話である。

(8) 電気が点いているのを寝転がりながら見上げて。(1;3.17) [状態]  
ゆうた: ツイタ、ツイタ

(9) 病院へ向かう車の中で。(1;3.28)

- a. ゆうた: ワンワン (車内灯を指さして。  
(観察者メモ: 車内灯のライトが二つ目のように、スイッチが鼻のように配置されていて、ゆうたには犬に見えたのかもしれない)  
母親がスイッチを押して車内灯を点ける。  
ゆうた: ツイタ [結果]  
母親: そうだねえ、点いたねえ。(車内灯を消す)  
しばらく後、ゆうた消えている車内灯を見て、再び。
- b. ゆうた: ツイタ、ツイタ [要求?]  
(観察者メモ: 「点けて」という要求、もしくは「点くものだね」と言う意味なのか。また、電灯を指すとも考えられる。)

1) 「ツイタ」は、1歳3ヶ月から1歳5ヶ月頃までは、電気が点いたときのみならず、消えたときにも「ツイタ」と発話する過剰一般化が見られた。また、表1にあるように、1歳5ヶ月頃には、同音だが意味の異なる「着く」、そして1歳6ヶ月には「付く」というように、意味の広がりを見せた。

(8)では、電気が点いているのを見て「現在の状態」について、「ツイタ」と「た形」で発話している。この発話は、電気が点いている状態について発話するときに観察されており、点いた直後における発話ではないことから、「(電気が)点いている」という状態を意味する発話であると考えられる。また、(9)では、まず、車内灯が点いたのを見て、(9a)のように「ツイタ」と発話し、その後しばらくしてから、今度は消えている車内灯を見て、電気を点けてほしいという要求を(9b)のように「ツイタ」という「た形」であらわしている。(ただし、観察者によると、この「ツイタ」の意味はいくつかの解釈が可能である。)

表1は、ゆうたが最初に獲得し頻繁に使用した動詞「ツク」の発達を示す

表1 「ツク」の発達

発話	年齢	状況	発話意図
ツイタ	1;3	祖母に抱かれて、電気のスイッチを触って遊んでいる。電気が点くたびに「ツイタ」と「ツイタ」と祖母が言い、ゆうたも次第に電気が点いたり、消えたりするたびに、「ツイタ」と繰り返すようになる。	繰り返し
ツイタ	1;3.17	部屋に寝転がって、電気が点いているのを見て。	状態
ツイタ	1;3.28	車の車内灯を見て。電気をつけてほしい。(もしくは 'あれは車内灯である' という指示表現か?)	要求?
ツイタ	1;5	車に乗っていて、祖父母の家に近づくと。	完了
ツイチャッタ	1;6.23	ご飯が手の甲についているのを指さして。	結果
ツイタ	1;6.23	ご飯が服についているのを見つけて。	結果
ツイタ	1;7.0	ハンガーを室内用物干し台にひっかけて。	完了
ツイチャッタ	1;7.22	テレビを点けて。	完了
ツイタ	1;8.4	テレビを点けて。	完了

ものである。「ツク」は(7)に示したように、1歳3ヶ月に「た形」で始まり、後に1歳6ヶ月で「オチル」が「オッチャッタ」と「ちゃった形」で発話されるまでは、(インプットをそのまま繰り返す場合を除き)ゆうたから発せられた唯一の動詞であった。<sup>2)</sup>

MFH, M&Fa-b および Murasugi (2009) に報告されるすみはれデータの分析と同様、ゆうたにも「た形」の動詞において、MRE が観察された。(10)は「た形」で要求、意志、ならびに願望をあらわす例である。<sup>3)</sup>

- (10) a. 「アイタ, アイタ」戸棚の扉を開けてほしくて。(1;7.1) [要求]
- b. 「ハイタ, ハイタ」靴をはきたいと、母のところへ来て。(1;7.16) [要求]
- c. 「ハイッタ, ハイッタ」母子手帳を袋に入れたいが、うまく入らず。(1;7.16) [意志]
- d. 「トッタ」洗面所で手を洗っていて、手の届かないところに置いてある石けんを取ってほしくて。(1;7.19) [要求]
- e. 「トッタ, ブブー (=車のおもちゃ)」ソファの下に入ってしまったおもちゃを孫の手で取ろうとしながら。実際には取れていない。(1;7.28) [願望]
- f. 「ア, ディタ (=デタ)」ソファの下に入ってしまったおもちゃを孫の手で取ろうとしながら。実際にはおもちゃは出てきていない。(1;7.28) [願望]

(10)に示すように、ゆうたは、「た形」の動詞で、要求および意志をあらわしている。例えば(10a)では、気に入った人形の入っている戸棚の扉を開けてほしくて、祖母にその旨を伝えている場面であるが、大人の文法では「開

2) 表1は「ツイタ」の発達の抜粋であり、詳しい発達は付録の表1を参照。  
 3) 「アイタ」の詳しい発達は、付録の表2を参照。

けて」もしくは「開きたい」となるべきところ、「アイタ」という「た形」で要求を示している。同様に、(10b)では靴を履きたいという意志について、大人の文法では「履きたい」と言うべきところを、「ハイタ」という「た形」の動詞で、(10c)ではノートを袋に入れたいという意志について、「入れたい」と言うべきところを、「ハイッタ」という「た形」で、(10d)では石けんを取ってほしいという要求をあらわすために、「取って」もしくは「取りたい」と言うべきところを、「トッタ」という「た形」であらわしている。また、(10e)及び(10f)では、ソファーの下に入ってしまったおもちゃを孫の手で取ろうとしている場面で、まだおもちゃが出てきていないのにもかかわらず、「トッタ」、「デタ」と発話し、「取りたい」、「出したい」という願望を「た」形であらわしている。<sup>4)</sup>

以上は、要求、意志、願望を「た形」であらわしている例だが、(11)に示すように「た形」は(現在)進行相および結果相もあらわした。

- (11)a. 「オチタ、オチョト、オチタ」アンパンマンの人形をベランダに出そうとしながら。(1;7.13) [現在進行]
- b. 「ツイタ」手の甲に(既に)付いているご飯粒を見て。(1;6.23) [結果]
- c. 「ア、オチタ、オチタ」床に落ちているカセットテープの箱を拾って。(1;7.5) [結果]
- d. 「ア、オチタ」布団の上に落ちている色鉛筆を指さして。(1;7.7) [結果]

(11a)では、「外に落としている」と進行形で言うべきところ、「オチタ」と

4) (10a)では、「開ける」と言うべきところを「開く」、(10c)では、「入れる」と言うべきところ「入る」を使用しており、いずれにおいても他動詞を自動詞として用いている。(この分析については Murasugi and Hashimoto 2004, Murasugi, Hashimoto and Fuji 2007 を参照されたい)。

いう「た形」であらわしている。(11b)では、手の甲に付いているご飯粒を見つけて、大人の文法では「付いている」と言うべきところ、「ツイタ」と「た形」であらわしている。また、(11c)ならびに(11d)では、落ちている物を見つけて、「オチタ」という「た形」であらわしている。<sup>5)</sup>これらは、大人の文法では、「落ちている」という「ている形」で表されるべき表現である。

### 2.2.2. ゆうたの不定動詞形「ちゃった」形

本稿ではさらに、動詞の活用が未獲得な段階において、「た」形があらわれた後、短い期間ではあるが「ちゃった」形も併用される時期があったことを付記する。ゆうたの発話には、主節不定詞(RI)の特徴とほぼ同じ特徴を表す表現が「た形」のみならず、主節不定詞の変種(RIA)の段階の後半には「ちゃった形」でも観察され、1歳6ヶ月後半から1歳8ヶ月の時期には「た形」とともに「ちゃった形」も主節不定詞の変種(RIA)の特徴を備えて使われた。すなわち、ゆうたの主節不定詞の変種(RIA)はMurasugiらの述べるように、1歳3ヶ月で「た形」であらわれたが、1歳6ヶ月後半からの1ヶ月半ほどは「ちゃった形」が併用され、その「ちゃった」形にもまた、主節不定詞の変種(RIA)の特徴が観察された事実を報告するものである。

「ちゃった形」がはじめてあらわれたのは、1歳6ヶ月である。(12)に示すように、1歳6ヶ月20日に象の人形が箱から落ちるのを見ているときに初めて「ちゃった形」の「オチチャッタ」があらわれた。<sup>6)</sup>そして、この「ちゃった形」があらわれて以降、1歳6ヶ月後半から1歳8ヶ月の期間、「ちゃった形」は「た形」とともに、頻繁に観察された。

5) 自然な日本語の表現としては、人形をベランダに出す場合、「外に落としている」ではなく、「外に出している」という表現が適当であるが、この時点で、ゆうたは「オチル」という動詞を広範囲の意味でとらえて使用しているようである。

6) 「オチル」の詳しい発達は、付録の表3を参照。



(12) 「オッチャッタ」象の人形が箱から落ちるのを見て。(1;6.20)[完了]

この「ちゃった形」は、「た形」と同様にMREを示した。

- (13) a. 「アイチャッタ」クリップの箱を母親に開けてほしい。(1;7.22)  
[要求]
- b. 「ハイチャッタ, ハイチャッタ」積み木が形合わせの穴にうまく入らず, 母親に積み木を渡して。(1;7.22) [要求]
- c. 「イチャッタ, イチャッタ」ボタンを押すと前に進む車のおもちゃで遊んでいるが, 壊れており, うまく動かない。車に動いてほしくて。(1;7.22) [願望]

(13a)では, クリップの箱を開けてほしくて, 母親に「アイチャッタ」と「ちゃった形」で, (13b)もまた, 「ハイチャッタ」と「ちゃった形」で, 積み木を穴の中に入れてほしいと母親に要求している。また, (13c)では, 壊れていてうまく前に進まない車のおもちゃに, 動いてほしいという願望を「行って」ではなく, 「イチャッタ」という「ちゃった形」であらわしている。

また, 「た形」と同様に, 結果相や(現在)進行相も「ちゃった形」であらわされた。(14)にその例を示す。

- (14) a. 「オッチャッタ」ベッドから降りながら。(1;6.28) [現在進行]
- b. 「ツイチャッタ」(付いた直後ではなく)既に服に付いているご飯粒を指さして。(1;6.23) [結果]

(14a)は, ベッドを降りるという行為を行いながら発話されており, 大人の文法では現在進行の「ている形」で「落ちている」と言うべきところ, 「オッチャッタ」と「ちゃった形」を使用している。<sup>7)</sup> また, (14b)は, (11b)と

同じ場面で, (11b)ではご飯が手に付いているのを指さして「ツイタ」と発話したのに対して, (14b)ではご飯粒が服に付いているのを見つけて「ツイチャッタ」と発話している。したがって, 1歳6ヶ月後半に「ちゃった形」が獲得されて以降は, 「た形」と「ちゃった形」はともにMREが観察されるなど, 同じように使用され, 1歳6ヶ月後半から1歳8ヶ月の前半までの時期には, それらはまだ明確には区別されていないことがわかる。

主節不定詞の変種の段階が終焉をむかえるのは, 動詞の現在形がでてきたころが, その兆しであると判断される。(15)に示すように, 1歳7ヶ月10日には, 現在形が初めて観察された。現在形の「ヨム」は母親の手を引き, 絵本を持って寝室に向かいながら発話されたものであるが, 「絵本を読んでほしい」という要求の表現であった。

- (15) 「ヨムウ」(現在形) 母親の手を引き, 絵本を手に寝室に向かいながら。(1;7.20) [要求]

この段階において, それまで「た形」や「ちゃった形」で表されていた命令や意志が, 現在形であらわされ始めたと言える。

1歳8ヶ月後半より, 動詞の活用形が多様化した。<sup>8)</sup> (16)に示すように, それまで繰り返しや決まり文句を除き, ほぼ「た形」もしくは「ちゃった形」であった動詞が, 否定形, 命令形, 進行形(ただし「ている形」ではなく「てる形」), また, 助詞を伴う未然形で表れるようになった。

7) 5の脚注に述べたように「降りる」というべきところ, ゆうたは「オチル」と表現している。

8) 1歳8ヶ月の特徴としては, 「シタイ」や「カボチャダ」などの「だ」(コピュラ)が出現した。また, 1歳9ヶ月には終助詞の「ね」「か」が出現し, また「ユウタハオフロニハイル」などのTopic Marker「は」が出始める。そして等位接続詞の「と」が, 「ブウプト, バシュ (=バス) ト」「ブドウト, ブドウト, ブドウト」「チッチャイバシュト, チッチャイバシュト, チッチャイバシュト」などという形であらわれ始めた。

- (16) a. 「アライ, ハインナイ」持っていたブロックを箱の穴に入れようとするが入らず。(1; 8.26) [否定]
- b. 「イレテ, ビュービューイレテ, ビュービューイレテ」鍋にクレヨン (=ビュービュー) を入れながら。(1; 8.26) [未然形+接続助詞]
- c. 「マダ, ハイッテル」ケーキを食べていて, 自分の器を指さし, まだケーキが残っているのを見て。(1; 9.0) [結果]
- d. 「カイト, カイト」クレヨンを母親に渡して。(1; 9.1) [要求]
- e. 「カケナイネエ」クレヨンの, 紙が巻いてあり描くことができないところで描いて。(1; 9.1) [否定]
- f. 「アケテ」クッキーの箱を手に取り。(1; 9.2) [要求]

例えば (16a) では, ブロックを箱に開いている穴に入れようとするが入らず, 「ハインナイ」と否定形で発話している。また, (16e) でも同様に, (クレヨンが) 「カケナイ」という否定形が観察されている。(16b) では, 鍋にクレヨンを次々と入れながら「イレテ」という未然形「いれ」に接続助詞「て」が付いた形で発話している。<sup>9)</sup> また, (16c) では, ケーキが自分の器にまだ残っているのを見て, (結果) 状態の「ハイッテル」があらわれた。さらに (16d) と (16f) では, 命令形による表現が観察され, それぞれ「カイト」, 「アケテ」という命令形で要求をあらわしている。

主節不定詞の変種 (RIA) の段階に「た形」もしくは「ちゃった形」で表されていたものが, (16c) の結果相, (16d, f) の要求などに見られるように, 1歳8ヶ月, もしくは1歳9ヶ月には遅くとも, それまでとは違う方法で, すなわち多くの動詞が活用を伴ってあらわされるようになっている。このこ

9) 「ビュービュー, イレテエ」というこの発話は, 「～シテ～シタ」というように, この時点では, 終止形の動詞とともに使われることはなく, 「～シテ～シテ～シテ」と動詞が連結されるだけであった。また, この直後に「ティッシュ, ハイッテ」という発話も観察されており, 「はいる」と「入れる」の自他交替の誤用も観察されている。

とから, この時期には明らかに主節不定詞の変種 (RIA) の段階が終了しているともみなすことができる。

### 2.2.3. ゆうたの記述的研究結果の総括

2.2.1. ならびに 2.2.2. で示した報告は, (17) に示すような MFH, M&Fa-b ならびに Murasugi (2009) の提案する日本語の主節不定詞の変種 (RIA) の特徴を, 記述的に強く支持するものである。

- (17) a. 時制が完全に指定されていない。
- b. 空主語とともにあらわれる。
- c. Modal Reference Effects が見られる。
- d. 動詞はイヴェント動詞が使われる。
- e. 動詞の末尾が「た形」であらわれる。
- f. 1歳台からあらわれる。(ヨーロッパ言語の RI より, 時期が早い。)
- g. 定動詞と同時期にあらわれない。

ゆうたの初期の動詞は, Murasugi らの日本語についての報告, ならびにヨーロッパ言語における主節不定詞 (RI) の特徴と同様, すべて主節において観察され, *Wh* 句および, 補文の中では観察されなかった。<sup>10)</sup> そして, その動詞はすべてイヴェント動詞であった。また, 空主語を許さない言語においても主節不定詞 (RI) では空主語を許すことが特徴とされているが, Murasugi らの述べるように, 日本語はそもそも空主語を許す言語であり, ゆうたの初期の動詞を含む発話においても, 空主語は頻繁に観察された。

また, ヨーロッパの言語の主節不定詞 (RI) が定動詞とともにあらわれるのに対し, 日本語を母語とする幼児にはそれがあらわれないとする Murasugi

10) 「オカアシャン ノッテル シカバシュ (=鹿の絵の付いているバス)」という関係節が1歳10ヶ月前半で一度観察されたが, それ以前のゆうたの発話はすべて単文である。

らの報告と同様、ゆうたの初期の動詞的要素において、1歳3ヶ月から1歳6ヶ月までは「た形」以外には、それぞれの動詞について他の活用形は観察されていない。

さらに、本稿では、(18)に示すように、ゆうたの発話には、主節不定詞 (RI) の特徴とほぼ同じ特徴を表す表現が「た形」のみならず、主節不定詞の変種 (RIA) の段階の後半には「ちゃった形」で観察されたことを報告した。

- (18) 1歳6ヶ月後半—1歳8ヶ月の時期には「た形」とともに「ちゃった形」も RIA の特徴を備えて使われる。

以上、ゆうたの主節不定詞の変種 (RIA) は Murasugi らの述べるように、1歳3ヶ月で「た形」であらわれ、1歳6ヶ月後半からの1ヶ月半ほどは「ちゃった形」が併用され、その「ちゃった」形にも主節不定詞の変種 (RIA) の特徴が観察されたことを報告するものである。

### 3. 大人の文法における不定形動詞

Murasugi and Fuji (2008b) ならびに Murasugi (2009) は、幼児の文法獲得の中間段階が、大人の文法の許容する範囲内での文法特徴を示すのでであるとすれば、日本語の大人の文法においても不定の「た」形とし、実際にそのような大人の研究が存在することを示唆している。本節では、日本語の大人の文法における不定形について考察し、更に次節の4節では、複数の不定動詞が日本語にも存在するとすれば、幼児がそれらの動詞を不定動詞として使用することは不自然ではないと考える統語的根拠について論ずる。

#### 3.1. 形態的要請による動詞活用 (Cinque 2004)

Cinque (2004) は、サレンティノ語のある一種とセルビア-クロアチア語

における再構築語の定形補文から接語が上昇する現象 (Clitic Climbing) を検討することにより、埋め込み文の動詞は現在形の形であらわれているが、それは形態的に適格な形にするためにその形になっているにすぎず、実はその動詞は時制を持った定動詞ではなく、時制のない不定詞であるという分析を示している (サレンティノ語: Calabrese 1993, Terzi 1992: 151ff., 1994, 1996, セルビア-クロアチア語: Progovac 1991, 1993, Terzi 1996, 289ff., Stjepanovic 1998 in Cinque 2004)。

プリンディジのサレンティノ語において、法助詞 (Mood particle) の *ku* が無いとき、接語は定形補文から上がることができ、再構築動詞に接語化する。

- (19) a. Voggyu (ku) lu kkattu  
(I) want Mood it buy 'I want to buy it.' (わたしはそれを買いたい。)
- b. Lu voggyu (\*ku) kkattu  
(I) it want Mood buy (わたしはそれを買いいたい。)

また(20)に示すように、セルビア-クロアチア語では、削除不可の法助詞、*da* の場合に、似たような現象が見られる。

- (20) a. Milan želi da ga vidi  
M. want/3sg particle him see/3sg
- b. ?Milan ga želi da vidi  
M. him want/3sg particle see/3sg  
'M wishes to see him.' (M は彼に会いたい。)

しかし、Cinque (2004) では、(19)-(20)に見られる接語の上昇が、定形補文 (時制を持った節) からの抽出であるということに疑問を呈する。まず、どちら

の言語においても、埋め込み文の動詞はその形式において、厳しく制限されており、動詞は現在時制のみでしかあらわれることができない。そしてその形態は、動詞の語幹に人称と数の一致が足されたものと同じ形をしている。特に、接語の上昇の見られる文では、(21)に示すように過去時制（および迂言的過去時制）の形式は許されない。

- (21) a. \***Lu** vulia kattavu  
 It wanted-1sg bought-1sg  
 ‘I wished I bought it.’ (私はそれを買いたかった。)  
 (サレンティノ語 — Andrea Calabrese, personal communication in Cinque 2004)
- b. \***Ja** bih **ga** voleo da sam posetio  
 I would him like particle be-1sg visited  
 ‘I would like to have visited him.’ (わたしは彼を訪ねたかったものだ。)  
 (Cf. Ja bih voleo da sam **ga** posetio ‘I would like to have visited him.’)  
 (セルビア-クロアチア語 — Lijljana Progovac, personal communication in Cinque 2004)

サレンティノ語における接語の上昇の見られる (21a) の文では、埋め込み文の動詞の「買う」が過去形で表される場合、その文は非文になる。また、(21b) のセルビア-クロアチア語も同様に、埋め込み文の動詞の「訪れる」が（迂言的に）過去形になると非文となる。しかし、Cf. 内の例に示すように、接語の上昇の起きていない文では、埋め込み文の動詞は過去形が許されるのである。Cinque (2004) は、これらの現象を観察し、これらの文は一見複文のようであるが、実は単文であり、埋め込み文の中の動詞語幹に人称と数の一致が足された動詞の形式が、定動詞ではなく、不定詞の代わりの形として扱われていると分析している。つまり、この形態素と語幹との連続した一致

は、語幹を適格な形態を持った語にするための方法であり、その動詞は不定詞のひとつであるとするのである。

### 3.2. 日本語における不定形としての終止形

Cinque (2004) の分析は、日本語のように動詞が語幹のみであらわれることができない言語において、時制を伴わずとも何らかの形態素が終助詞として選ばれて音声化 (Spell-out) される可能性を示唆している。Kawai (2006) は、日本語の例外的格付与構造における主語の目的語への繰り上げ構文は、時制もアスペクトもない小節 (small clause) であるとする分析を提案し、Kuno (1976) 以来指摘されてきた、一見、定動詞 (finite verb) に見えながら、日本語にも時制を持たない不定形の動詞が存在するとする仮説を支持している。

従来、(22b) のような日本語の例外的格付与構造は、(22c) のような主語の目的語への繰り上げ構文であると分析されてきた (e.g., Kuno 1976)。しかし、Kawai (2006) は、(22a) と (22b) の文を比較し、従来の (22a) の埋め込み文も (22b) の埋め込み文も定形 (finite) の節であり、(22c) のような主語の目的語への繰り上げが随意に起きるという見方は、ミニマリストの最終手段の原理 (last resort) (Chomsky 1993, 2000) に反するとしている。

- (22) a. 彼女は [その男が詐欺師だと] 信じている  
 b. 彼女は [その男を詐欺師だと] 信じている (Kitagawa 1986 in Kawai 2006)  
 c. 彼女はその男<sub>i</sub> を [t<sub>i</sub> 詐欺師だと] 信じている (Kawai 2006)

そこで、Kawai (2006) は、(22b) の埋め込み文が定形であるとする従来の分析に対して、(22b) の埋め込み文は動詞とアスペクトを欠いた小節であると主張する。その根拠として、まず、(23) に示すように、時を表す副詞

が主語の目的語への繰り上げのない補文では認められるが、繰り上げのある補文では認められないことを挙げている。

(23) 彼女は大学が/\*を明日休みだと信じていた (Kawai 2006)

(23) は、主語の目的語への繰り上げ補文がどちらも定形節であるとするならばあらわれないであろう、相違点を示している。また、2つ目の根拠として、(24) に示すように、この補文は過去時制を認めない (Kuno 1976) ことを示している。<sup>11)</sup>

(24) a. 彼女はその男を「詐欺師だと」信じている

b. \*? 彼女はその男を「詐欺師だったと」信じている (Kawai 2006)

そこで、Kawai (2006) は、日本語の主語の目的語への繰り上げ補文は、否定は含むかもしれないが、時制や屈折は含まない小節であると論ずる。<sup>12)</sup> そして、日本語のこの補文は (25) と (26) の対比で示されるように、対照的な英語の補文と同じ構造を持つが、日本語の動詞の形態的貧弱さから、日本語の小節においては、発音の上では過去時制である定動詞と区別がつかないと提案している。

(25) ジョンは [<sub>AgroP</sub> メアリー<sub>2</sub> を [<sub>PredP</sub> t<sub>2</sub> [かわいく/天才で [<sub>Pred</sub> ある] と信じている]]] (Kawai 2006)

(26) ... [<sub>VP</sub> consider [<sub>AgroP</sub> Mary<sub>2</sub> [<sub>Agro'</sub> [<sub>PredP</sub> t<sub>2</sub> [<sub>Pred</sub> e] cute]]]]] (Kawai 2006)

もしこの分析が正しければ、日本語の主語の目的語への繰り上げが随意に

11) Kawai (2006) では、非文の表示は Kitagawa (1986) に従っている。

12) ここでの小節とは、不定形小節 (non-finite clause) を意味する。(Kawai 2006)

起きるといふ、移動の原則である最終手段の原理への違反も解消することができる (Kawai (2006) は示唆し、また、Koizumi (1994) の、日本語の主格の目的語は T の指定部にあるという分析をもとに、日本語の主語の目的語への繰り上げ補文には時制とアスペクトがないと提案している。

(27) a. \*? ジョンはメアリーをロブスターが好きだと信じている

b. \*? ジョンはこの大学をキャンパスが大きいと信じている (Kawai 2006)

(27) に示すように、主格の目的語は主語の目的語への繰り上げ補文にあらわれない。Kawai (2006) はこれを、もし日本語の主格の目的語が T の指定部にあるならば、この繰り上げ補文は時制とアスペクトのない小節であるため、目的語の主格が認可されないためだと説明しており、日本語における時制のない動詞の存在を示している。

#### 4. 大人の文法からの RIA のからの見直し

2 節では、主節不定詞の変種 (RIA) 現象が、日本語を話す幼児における言語獲得初期の段階に観察されたことを報告し、日本語における主節不定詞の変種 (RIA) は、「た形」が最初の動詞的要素の形式であることを報告した。さらに、動詞活用が獲得される直前の 1 ヶ月半は「ちゃった形」もあらわれたことを報告した。

では、なぜ二種類の主節不定詞の変種 (RIA) があらわれるのか。3 節では、一定の特徴をもつ言語の大人の文法において、動詞が形態的に適格な形になるよう一定の形態素が終助詞として選ばれて音声化される操作があるとする Cinque (2004) ならびに Kawai (2006) による分析を概観した。Cinque (2004) はサレンティノ語とセルビア-クロアチア語における、一見定動詞

に見える埋め込み文の動詞について、これらは実は形態的に適格な形にするためにその形になっているにすぎないとして、これらの言語にも時制のない不定詞が存在するとする分析を提案している。同様の観点から、Kawai (2006) では、日本語の主語の目的語への繰り上げ構文における補文の動詞の終止形である「だ」を例に取り、それが必ずしも現在のことを意味しているのではなく、時制を持たない不定形の動詞であると論じている。

Murasugi (2009)、MFH ならびに M&Fa-b の提案する主節不定詞の変種 (RIA) の「た形」や、本稿のゆうたが示した「ちゃった形」の「た」や「ちゃった」は、一般的に大人の文法では時制やアスペクトをあらわす形態素である。MFH ならびに本稿 2 節の観察結果が記述的に妥当なものであるとする前提に立つと、日本語の主節不定詞の変種 (RIA) が「た形」とともに「ちゃった形」でもあらわれる段階が存在する。言語獲得初期の日本語を母語とする幼児の発話する動詞の形態を見ても、動詞が語幹のみで音声化されることはない。

一方、大人の日本語は動詞の語幹のみでは動詞として成立せず、必ず何らかの終助詞が伴われて音声化される言語である。Cinque (2004) や Kawai (2006) の分析を採用すれば、時制のない動詞が大人の文法にもあり、定動詞の形態を持ちながら、不定詞である動詞が存在する。

以上の言語獲得に関する記述的事実と統語理論的説明に基づくと、言語獲得初期の幼児がまだ正しく時制を獲得していない段階においても、動詞を形態的に適格な形にして音声化するために無標の形態素を選んでいるとする可能性が考えられる。この分析は、Cinque (2004) の述べる形態的要請の操作が、言語獲得初期の幼児において既に獲得されており、幼児の最初の動詞的な要素は、主節不定詞 (RI) にみられるように、当該の文法（ならびに言語獲得）において、時制に関して未指定の形式である可能性を示唆するものである。

したがって、本稿で報告した二種類の日本語における主節不定詞の変種

(RIA) は、時制は未指定であるが、動詞を適格な形態にする操作により生成された不定詞であると分析される。わずか 1 歳台の主節不定詞 (RI) の段階にある幼児が、日本語の動詞は語幹のみでは音声化されることができず、語幹に終止形が伴われなければ発音されないという知識を既に持っており、多くの動詞活用の中から可能な形式を自ら選択して、音声化するのである。

では、なぜ代用形 (Surrogate Form) として、現在形である「る」形ではなく過去形の「た」形（その代用としての「ちゃった」形）が、幼児によって選択されるのか。

Murasugi (2009) では、他の言語において不定の動詞形が使われる場合に、日本語では「た」形が関係節など埋め込み文内のみならず単文においても選択されることを指摘し、「た」形が代用形 (Surrogate Form) の中で、最も「近い」（無標の）形式であると提案している。その根拠として、例えば、Rizzi (1993/1994) では、強い命令を意味する場合に、イタリア語では (28a) のように時制を伴わない動詞形が現れることを指摘するが、日本語においては、(28b) に示すように、過去形の「た」形が選択されると指摘する。

(28) a. Partire immediatamente!

go immediately (Rizzi 1993/1994)

b. (さっさと) 帰った、帰った!

(28b) のような「た」形は、「さあ、買った、買った！今日は大安売りだよ！」における「買った」（現在形は「買う」）や「どいた、どいた、お姫様のお通りだよ！」における「どいた」（現在形は「どく」）というように他の動詞においても同じような意味的な効果を伴って使われる。また、「た」形は、過去についてのみならず、現在や未来、仮定についても選択される形式でもある。

- (29) a. 東京と名古屋を行ったり来たりする。  
 b. 明日の予定はなにをするんだったかな？ そうだ、明日は運動会だった。  
 c. もしも私が家を建てたなら、小さな家を建てたでしょう。

更にイタリア語と日本語の平行する (28) のような例は、とりもなおさず、Infinitive Form (不定詞原形) の形式を当該言語を持つか否かと、幼児が RIA の形式で不定形をあらわすか否かは、独立した現象であることを示すものであることを示唆している。

この Murasugi (2009) の分析に加え、本稿では、更に、日本語の事実として「た」形は、「る」形よりも、「書いた」「書く」といったパラダイムにみられるように、語末の形態要素として、よりはっきりと見えやすい形式で示されやすいことを指摘したい。幼児が言語環境として直接接する言語事実において、「た」形が「る」形よりも実際に多いのかどうかは定かではないものの、文法的にも、あるいは実際の形式上の特徴としても、「た」形は、時制のない動詞の中でもっとも無標な形式なのであろう。そして、その「た」形にアスペクト・ムードを含む意味を加えた代用形として、「ちゃった」形も、時制のない動詞を用いる初期の言語獲得の段階において使用されるのだと考えるものである。

## 5. 結論

MFH, M&Fa-b ならびに Murasugi (2009) は、主節不定詞 (RI) は、幼児が言語獲得時に見せる時制が未指定の段階の誤用であり、世界のどの言語においても、言語獲得の初期に見られる現象であると提案し、日本語において、主節不定詞の変種 (RIA) として「た形」(あるいは命令形「て形」) があらわれると提案している。本稿では、彼らの研究を支持する記述的観察結果が

ゆうたからも得られることを報告した。加えて、ゆうたにおいては、主節不定詞 (RI) の変種として「た形」のみならず、RIA の時期の後半 1 ヶ月半間のみに「ちゃった形」があらわれた点を報告した。

また、本論文では、時制を持たない大人の文法での終止形の存在 (Cinque 2004, Kawai 2006) について論じ、日本語における主節不定詞の変種 (RIA) がその一種である可能性を論じた。日本語において、時制を未獲得である幼児の動詞が「た形」であられるのは、幼児が動詞の語幹に形態的要請によって活用形 (終止形) を付ける必要がある (Cinque 2004) という知識を、動詞的要素を獲得しはじめる初期から既に持っており、「た」形がもっともその候補として近い無標の形式である Murasugi (2009) の仮説を、本稿は支持するものである。更に、本稿では「ちゃった」形も主節不定詞の変種としてあらわれる時期があったことから、動詞を適格な形態にするためにその時点で可能である終止形を選択する候補は、「た」形がもっとも無標であるものの、他にも候補があり、それが語尾に付いたものであると提唱するものである。幼児が初期の時制のない「動詞」をもつとき、その活用形は「た」形ではじまり、「た形」で近未来やアスペクト、ムードの諸相をあらわす。しかし、「た」形のみならず、その段階から脱却する直前には、同じ意味で別の形「ちゃった」形も使用する段階がある。このことは日本語の大人の文法と同様、時制のない動詞形は「た」形に限らないことを支持するものであろう。

本稿の結論は、ヨーロッパ言語の主節不定詞 (RI) 現象と同様に、日本語にも主節不定詞の変種 (RIA) の現象が起こりうるとする Murasugi, Fuji, Hashimoto (2007) をはじめとする一連の研究に対して、更なる新たな記述的・理論的根拠を加えるものであり、Cinque (2004), Kawai (2006) の統語研究と融合するものである。

## 謝 辞

本稿は南山大学大学院（外国語学研究所・人間文化研究所）ならびに南山大学言語学研究所センターを拠点とした言語獲得に関する研究の積み重ねの上に拠って立つ研究であり、議論を積み重ねた歴史の中で、折々に貴重なコメントや議論をしてくださった斎藤衛氏、橋本知子氏、Luigi Rizzi 氏、Kamil Deen 氏、Vincenzo Moscati 氏、Colin Phillips 氏、Ken Wexler 氏、William Snyder 氏、杉崎鉦司氏、富士千里氏、小川敬子氏、澤田尚子氏、瀧田健介氏をはじめ、関係者の皆様に感謝の意を表したい。本稿で提示した縦断的研究は執筆者の一人である中谷（村井）友美の実息の観察記録に基づくものである。2年にわたる詳細なデータ収集は、ゆうたくん、村井偉志氏、ならびに村井義明・智恵子氏と中谷佳南・礼子氏のご協力の賜物である。ここに心から感謝する。また、本稿を執筆するにあたり、Memo Cinque 氏、河井道也氏、斎藤衛氏、瀧田健介氏、宮川繁氏、有元将剛氏、富士千里氏から大変貴重なアドバイスを頂戴した。ここに深く感謝する。

本稿は、2008年度ならびに2009年度南山大学パッヘ研究奨励金（I-A-2）ならびに科学研究費補助金（JSPS）基盤研究C（#20520397）による支援をいただいていた研究である。ここに記して感謝する。

## 参考文献

- Abe, Y. (1992) "Dethematized Subjects and Property Ascription in Japanese." In *Language, Information and Computation: Proceedings of Asian Conference*. Ed. by C. Lee and B. Kang. Thachaksa. Seoul. 132-144.
- Calabrese, A. (1993) "The Sentential Complementation of Salentino: A Study of a Language without Infinitival Clauses." In *Syntactic Theory and the Dialects of Italy*. Ed. by A. Belletti. Turin: Rosenberg Sellicer. 28-98.
- Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory." In *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*. Ed. by K. Hale and S. J. Keyser.

- Cambridge, Mass.: MIT Press. 1-52.
- Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework." In *Step by Step: Essays in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. Ed. By R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka. Cambridge, Mass.: MIT Press. 89-155.
- Cinque, G. (2004) "'Restructuring' and Functional Structure." In *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*. Ed. by A. Belletti. New York: Oxford University Press. 132-191.
- Guasti, M. T. (2002) *Language Acquisition: Growth of Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hyams, N. (2005) "Child Non-Finite Clauses and the Mood-Aspect Connection: Evidence from Child Greek." In *The Syntax, Semantics and Acquisition of Aspect*, Ed. by P. Kempchinsky and R. Slabakova. Dordrecht: Kluwer. 293-316.
- Hoekstra, T. and N. Hyams. (1998) "Aspects of Root Infinitives." In *Lingua 106*. 91-112.
- Kawai, M. (2006) "Raising to Object in Japanese: A Small Clause Analysis." In *Linguistic Inquiry 37*. 329-339.
- Kitagawa, Y. (1986) "Barriers to Government." In *Proceedings of NELS 16*, ed. by S. Berman, J. Choe, and J. McDonough. Amherst: University of Massachusetts, GLSA. 249-273.
- Koizumi, M. (1994) "Nominative Objects: The Role of TP in Japanese." In *Formal Approaches to Japanese Linguistics 1*. Ed. by M. Koizumi and H. Ura. MIT Working Papers in Linguistics 24. Cambridge, Mass.: MIT, Department of Linguistics and Philosophy, MITWPL. 211-230.
- Kuno, S. (1976) "Subject Raising." In *Syntax and Semantics 5: Japanese generative grammar*. Ed. by M. Shibatani, New York: Academic Press. 17-49.
- Murasugi, K. (2009) "What Japanese-speaking Children's Errors Tell us about Syntax" Presented at Asian GLOW VII. English and Foreign Languages University. Hyderabad, India, February 28<sup>th</sup>.
- Murasugi, K. and C. Fuji. (2008a) "Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head- Movement." In *BUCLD 33 Proceedings Supplement*. Ed. by J. Chandlee, M. Franchini, S. Lord and M. Rheiner. Cascadilla Press.
- Murasugi, K. and C. Fuji. (2008b) "Root Infinitives: The Parallel Routes the Japanese- and Korean-speaking Children Step in." Paper presented at JK18. City University of New York, November 13<sup>th</sup>.
- Murasugi, K., C. Fuji and T. Hashimoto. (2007) "What Acquired Later in an Agglutinative



- Language.” Paper presented at Asian GLOW VI. Chinese University of Hong Kong, December 27<sup>th</sup>.
- Murasugi, K. and T. Hashimoto. (2004) “Three Pieces of Acquisition Evidence for the *v*-VP frame.” In *Nanzan Linguistics 1*. Center for Linguistics, Nanzan University. 1–19.
- Murasugi, K., T. Hashimoto and C. Fuji. (2006) “VP-Shell Analysis for the Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives.” In *Linguistics 45*. 615–651.
- Progovac, L. (1991) “Polarity in Serbo-Croatian: Anaphoric NPIs and Pronominal PPIs.” In *Linguistic Inquiry 22*. 567–572.
- Progovac, L. (1993) “Locality and Subjunctive-like Complements in Serbo-Croatian.” In *Journal of Slavic Linguistics 1*. 116–144.
- Rizzi, L. (1993/1994) “Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: The Case of Root Infinitives.” In *Language Acquisition 3*. 371–393.
- Sano, T. (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*, Ph. D. Dissertation, UCLA.
- Sano, T. (1999) “Verbal Inflection in the Acquisition of Japanese.” (<http://coe-sun.kuis.ac.jp/public/paper/outside/sano2.pdf>)
- Stjepanović, S. (2001) “Clitic Climbing without Climbing out of Seemingly Finite Clauses and Implications for Restructuring.” Abstract of a paper presented at the Workshop on Slavic Pronominal Clitics, ZAS, Berlin. February 8–9.
- Stephany, U. (1997) “The Acquisition of Greek.” In *The Cross Linguistic Study of Language Acquisition*. Ed. by D. I. Slobin. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. 183–333.
- Terzi, A. (1992) *PRO in Finite Clauses: A Study of the Inflectional Heads of the Balkan Languages*, Ph. D. Dissertation, CUNY.
- Terzi, A. (1994) “Clitic Climbing from Finite Clauses and Long Head Movement.” In *Catalan Working Papers in Linguistics*, 3 (2), 97–122.
- Terzi, A. (1996) “Clitic Climbing from Finite Clauses and Tense Raising.” *Probus*, 8. 273–295.
- Wexler, K. (1994) “Optional Infinitives, Head Movement, and Economy of Derivation.” In *Verb Movement*. Ed. by N. Hornstein and D. Lightfoot. Cambridge University Press. Cambridge. 305–350.
- Wijnen, F. (1996) “Temporal Reference and Eventivity in Roor Infinitives.” In *Proceedings of*

- the Workshop on the Interpretation of Root Infinitives and Bare Nouns*. Ed. by J. Schaeffer. MIT Occasional Papers in Linguistics. 12–25.
- 加藤幸子・佐藤友美・竹田夕希子・見吉律子・酒井由美・小泉政利, (2003), 「“Root Infinitives” 日本語からの検証」, 『東北大学言語学論集 12』, 113–127.
- 野地 潤家, (1973–1977), 『幼児の言語生活の実態 I–IV』, 東京, 文化評論出版.

付録

表1 「ツク」の発達

年齢	発話	原形	状況	実際の発話の形態		意図する意味と形態	
				動詞	過去	動詞	形態
1;3	ツイタ	ツク	祖母に抱かれて電気のスイッチを触って遊んでおり、電気がつくたびに祖母が「点いた」と言うのに対して、繰り返す	動詞	過去	動詞	繰り返し
1;3.17	ツイタ	ツク	電気が点いているのを見て。	動詞	過去	動詞	状態
1;3.28	ツイタ	ツク	車のルームライトを見て。	動詞	過去	動詞	要求?
1;5	ツイタ	ツク	車に乗っていて、祖父母の家に近づくと。	動詞	過去	動詞	完了
1;6.23	ツイチャッタ	ツク	ご飯粒が手の甲に付いているのを指さして。	動詞	完了	動詞	結果
1;6.23	ツイタ	ツク	ご飯粒が服にも付いているのを見つけて。	動詞	過去	動詞	結果
1;6.26	ア、ツイタ	ツク	母親が充電式のランプが点かないと言っていると、それに対して。(実際は点いていない)	動詞	過去	動詞	否定?
1;6.26	ツイタツタ	ツク	絵本『くっついた』を取りに行って。	動詞	過去	動詞	過去
1;6.28	ア、ツイタ	ツク	ステレオの電源を入れて。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.0	ツイタア	ツク	ハンガーを室内用の物干し台にかけて。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.13	ア、ツイタツタ	ツク	めいぐるみを靴に入れてベランダに出して遊びながら。	動詞	過去+た / 完了	動詞	完了
1;7.13	ツイタツタ、ツイタツタ	ツク	靴を履きたいと母親のところへ来て。	動詞	過去+た / 完了	動詞	完了
1;7.16	ア、ツイタツタア、ツイチャッタ	ツク	意味不明。	動詞	完了		完了
1;7.16	ツイタア	ツク	テーブルを壁際まで押して。	動詞	過去	動詞	過去
1;7.22	ウワ、ツイチャッタ、ツイチャッタ	ツク	テレビを点けて。	動詞	完了	動詞	完了
1;7.30	ア、ツイチャッタ、ハレハレ	ツク	土が服についてしまったので、自分で払いながら。	動詞	完了	動詞	完了
1;7.30	ツイタツタ	ツク	牛と馬の人形で遊んでいて、祖母が(2つの人形が)くっつく?と言っていると。	動詞	過去+た / 完了	動詞	過去
1;7.30	ツイタツター、ツイタツター	ツク	自分で隠した絵本と人形をソファの下から出して。	動詞	過去+た / 完了	動詞	完了

1;8.4	ツイタ	ツク	テレビを点けて。	動詞	過去	動詞	完了
1;8.10	ジャア、ヨイショオ、ツイタア	ツク	セロテープを貼ろうとして。	動詞	過去	動詞	
1;8.10	ツイタア	ツク	DVDの入っている袋を置いて。	動詞	過去	動詞	完了

表2 「アク」の発達

年齢	発話	原形	状況	実際の発話の形態		意図する意味と形態	
				動詞	過去	動詞	形態
1;7.1	アイタ	アク	障子を開けながら。	動詞	過去	動詞	現在進行
1;7.1	アイタ	アク	色鉛筆を箱から出した。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.1	アイタ、アイタ	アク	棚の扉を開けたいが開かないので、祖母に開けてくれと頼んでいる。	動詞	過去	動詞	要求
1;7.1	アイタ	アク	棚の扉を開けたいが開かないので、祖母に開けてくれと頼んでいる。	動詞	過去	動詞	要求
1;7.1	アイタ、アイタ	アク	棚の扉を開けたいが開かないので、祖母に開けてくれと頼んでいる。	動詞	過去	動詞	要求
1;7.7	アイタ	アク	障子を閉めたいが、閉まらず、祖母に手伝ってもらい閉める。	動詞	過去	動詞	現在
1;7.7	アイタア	アク	ドアを祖父に開けてもらおうと。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.7	アイタア	アク	ドアを祖父に開けてもらいたい。	動詞	過去	動詞	要求
1;7.7	アイタ	アク	祖父がドアを開けると。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.13	アイタ、アイタ	アク	ベランダへ出る戸を開けて。	動詞	過去	動詞	現在 / 完了
1;7.16	アッタイ、イッショオ、アッタアイ	アク	ドアを開け閉めしながら。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.22	キップ、キブ、アイタ、アイタ、アイチャッタア	アク	クリップ(きっぷと発音)の箱を開けてほしい。	動詞	過去 / 完了	動詞	要求
1;7.22	アイチャッタ	アク	クリップの箱をあいちャったしたいの?(開けたいの?)と母親が言う。実際に開けてほしい。	動詞	完了	動詞	要求
1;7.28	アウウ、アウウ	アク	ミニトマトの入っている箱のふたを開けてほしい。	動詞	現在	動詞	要求

1;7.30	アテ、アテ、 バシユ、ア テ	アク	庭で遊んでいて、部屋の中にバスを見つけたので、ガラスのドアを開けようとして。	動詞	要求	動詞	要求
1;7.30	アイタ、ア イタ	アク	ハロウィンの絵の付いた缶を開けてはしくて。(ビデオなし)	動詞	過去	動詞	要求

表3 「オチル」の発達

年齢	発話	原形	状況	実際の発話の形態		意図する意味と形態	
1;6.20	オッチャッタ	オチル	ぞうの人形が箱の上から落ちて。	動詞	完了	動詞	完了
1;6.20	オッチャタ	オチル	母親が落ちちゃったねえと言うと繰り返して。	動詞	完了	動詞	完了
1;6.28	オッチャッタ	オチル	ベッドから降りながら。	動詞	完了	動詞	現在進行
1;7.0	オチタア、 オチタア	オチル	ハンガーが落ちたのを見て。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.0	オチタ	オチル	ハンガーが落ちたのを見て。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.0	オチタ	オチル	箸を落としてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.1	オチタ	オチル	色鉛筆の箱が倒れてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.5	ア、オチタ、 オチタ	オチル	落ちているカセットテープの箱を拾って。	動詞	過去	動詞	結果
1;7.5	ア、オチタ	オチル	梅干しを落としてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.7	オチタア	オチル	布団の上に落ちている色鉛筆を指さして。	動詞	過去	動詞	結果
1;7.7	オチタア	オチル	色鉛筆を縁側に投げて。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.10	オチタオチ タ	オチル	何かが落ちてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.10	ア、オチタ	オチル	鉛筆を落としてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.10	ビュービュー、 オチチャッタ、 オチチャッタ ア、オチチャ ッタア、オチ チャッタ、オ チチャッタ	オチル	絵本『機関車チューチュー』の石炭車が跳ね橋から落ちる場面の絵を指でなぞりながら。	動詞	完了	動詞	完了
1;7.10	オチチャッ ター、チュー チュー	オチル	絵本『機関車チューチュー』の石炭車が跳ね橋から落ちる場面の絵を見て。	動詞	完了	動詞	完了
1;7.10	オチチャッ ター	オチル	跳ね橋のところで(機関車チューチューが)落ちちゃったと母親が言う。	動詞	完了	動詞	完了

1;7.10	オチタ	オチル	絵本『機関車チューチュー』の石炭車が跳ね橋から落ちる場面の絵を見て。	動詞	過去	動詞	過去 / 完了
1;7.12	ポーウ、ポー ウ、オチタ、 オチタ、ポー ウ	オチル	ロフトの上から下に落ちているボールを指さして。(ボールはゆうたが自分で落としたもの)	動詞	過去	動詞	結果
1;7.12	オチタ、 ポーウ	オチル	ロフトの上から下に落ちているボールを指さして。(ボールはゆうたが自分で落としたもの)	動詞	過去	動詞	結果
1;7.13	オチタ、オ チト、オチ タ	オチル	アンパンマンの人形をペランダに出そうとしながら。	動詞	過去	動詞	現在進行
1;7.13	ア、オチタ	オチル	アンパンマンの人形を落としてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.13	オチタ	オチル	椅子の上に乗せてある靴を履こうとして、靴が落ちてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.16	ア、オチタ、 タイヤ	オチル	タイヤを前日に落としてしまっ、ないことを言っている。	動詞	過去	動詞	過去
1;7.16	ア、オチタ	オチル	ミニカーを落としてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.16	ア、オチタ	オチル	ご飯粒を見つけ、ロフトから階下に捨てて。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.20	オチタ	オチル	みそ汁をこぼしてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.22	オチチャッタ、 オチチャッタ	オチル	茶碗から何かを飲むまねをして。	動詞	完了	動詞	?
1;7.28	オチタ	オチル	(少し前に自分で中に入れた)箱の中に入っていたクレヨンを出して。	動詞	過去	動詞	結果
1;7.28	ダッチッタ	オチル	タッパを落としてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.28	オチタ	オチル	ペンをペン立てに入れようとして落としてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.28	オチチャッタ	オチル	ソファから落ちてしまっ、祖父が落ちちゃったと言う。	動詞	完了	動詞	完了
1;7.30	ア、オチタ	オチル	人形についているタグを触っていて、取れてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.30	オチタ	オチル	一度取れてしまった人形のタグをもう一度人形に載せるが、また落ちてしまっ。	動詞	過去	動詞	完了
1;7.30	ア、オチタ	オチル	絵本の絵の中におもちゃの車が落ちているのを見て。	動詞	過去	動詞	結果
1;8.3	ア、オチタ	オチル	筆箱を開けて。	動詞	過去	動詞	

1;8.3	オチチャッタ	オチル	筆箱の中身が落ちて、落ちちゃったと祖母が言う。	動詞	完了	動詞	完了
1;8.5	オチタ	オチル	浴室の方でもの落ちる音がしたので、何か落ちたねえと母親が言う。	動詞	過去	動詞	過去
1;8.9	オチタ	オチル	石けんを取ろうとして落ちしまい、石けんを指さして。	動詞	過去	動詞	完了
1;8.9	フタア、オッチャッタ、フタア、オッチャッタ	オチル	ふたの付いたバケツが倒れてしまっ。 (倒れることをユウタは落ちると言う)	動詞	完了	動詞	完了
1;8.10	オチタ	オチル	コインで遊んでいて、コインが下に落ちると。	動詞	過去	動詞	完了
1;8.10	オチタア	オチル	手に持っていたミニカーが落ちて。	動詞	過去	動詞	完了